

ケベック文学と移民作家キム・チュイの初期3部作

関, 未玲
立教大学外国語教育研究センター : 教授

<https://doi.org/10.15017/7162058>

出版情報 : Stella. 42, pp.377-393, 2023-12-18. 九州大学フランス語フランス文学研究会
バージョン :
権利関係 :



ケベック文学と移民作家キム・チュイの初期3部作

関 未 玲

カナダで唯一フランス語のみを公用語とするケベック州では、現在移民作家の活躍によりフランス語で書かれた文学作品が次々と上梓され、ケベックのみならずフランスやフランス語圏全体で注目されている。その代表格となるのは、2013年にアカデミー・フランセーズ会員に選出されたダニー・ラフェリエールの作品と言えよう。同僚のジャーナリストが殺害されたのを機に、デュヴァリエ政権下のハイチからカナダへと亡命したラフェリエールは、工場勤務などで生計を立てるなど苦節9年を経て、『ニグロと疲れないでセックスする方法』¹⁾というセンセーショナルなタイトルを持つデビュー作で再び文筆業に復帰することとなった。彼のように、ヨーロッパ圏以外の国から移住した「新移民作家」と呼ばれる作家の活躍は目覚ましく、昨今ではとりわけアジア系女性作家の作品も注目され、なかでもベトナム出身のキム・チュイはメディアへの出演も多く、ケベック人から支持されている作家の一人である。本稿では、ケベック文学史の概要と最近の流れを確認したあと、公用語としてのフランス語の確立と移民作家の活躍、さらにキム・チュイの初期3部作とも呼べる『小川』『満ち足りた人生』『ヴィという少女』を取り上げて比較することで、チュイ作品のエクリチュールの変化について明らかにしてゆきたい。

ケベック文学

北米に位置するカナダのケベック州は、一年の半分以上が冬と言われている。ケベック人シンガー・ソングライターのジル・ヴィニョーが「私の国は国ではない、冬だ」²⁾と歌ったように、厳しい自然はケベック文学を語るうえで触れずには述べることができぬほど密接した主題となっている。と同時に、英語が主流を占めるカナダ連邦において、フランス語を唯一の公用語とするケベック州の稀有な歴史が、ケベック文学に現在の形をもたらししていることもまた明白である。本稿で取り上げるキム・チュイは、1978年に家族とともにケベックに移

住している。彼女の生い立ちについては後ほど触れるが、移住の前年にあたる1977年に、ケベックではフランス語憲章（通称101号法）が制定されている。フランス語で作品を次々と発表する現在の移民作家の活躍は、この101号法に端を発していると言えるだろう。それまでフランス語・フランス文化が守られていたとはいえ英語が主流だったケベック州で、フランス語憲章によりフランス語が唯一の公用語となったことで、その後ケベック州が迎え入れた移民はフランス語を学ぶこととなった。歴史を振り返れば、フランス語憲章制定以前の1774年にすでにケベック法が制定されており、公共の場でのフランス語の使用が認められていたし、さらには1867年に制定された憲法第133条において、ケベック州を含むカナダ連邦で英仏両言語を用いることも認められている。とはいえ実際のところ、カナダの一族にすぎぬケベックにおいてフランス語は二流言語としての地位に甘んじ、フランス系移民は「二級市民」とも言える境遇にあったことも事実である。キャリア職位は英語を話す英系が独占し、仏系はノンキャリア職位の地位で英系の上司のもとで働くか、農村にとどまり、過酷な自然に左右される生活を送らざるを得なかった。当時住民の8割が仏系でありながら、経済活動で独占的な地位を占めるのが英系住民であることへの不満は、近代化の波とともに都市生活者が増えたことでさらに募ってゆく。敬虔なカトリック教徒として農村地帯でこれまでの文化と暮らしを踏襲していた仏系は、1960年代に遅れてやってきた「静かな革命」と呼ばれる近代化のなかで都市労働者が増加したこともあり、カトリック教会からの自立と経済的自立を果たしてゆく。教育改革、電力州有化などの経済システムの再構築がはかられ、次々と近代化が果たされていった。それゆえケベック文学のなかで厳しい寒さと大地、さらに過酷な暮らしが、物語を貫く主要なテーマとして描かれていたのは、19世紀後半から1930年代の時期となる。

当時、ケベック文学として大いに話題となった作品に『マリア・シャプドレーヌ』³⁾があるが、同書はじつはフランス人ジャーナリストで作家のルイ・エモンの筆により記されている。しかしエモンはケベック州のペリボンカの森林地帯で労働者として働いた経験をもとにこの作品を執筆しており、テーマもまさに厳しい自然を舞台とし、その過酷さと暮らしぶりを乾いた文体で描いたケベックの郷土小説として本作は位置付けられている。残念なことにエモンは、作品が世に出される前にカナダの地で命を落としている。『マリア・シャプド

レーヌ』は、その後世界各国で翻訳され、記録的な売り上げを残し、ケベック小説として人々の胸に刻まれることとなった。ペリボンカの村に住む主人公マリアは、結婚を心に決めた相手がいたが、その彼は大雪のなか遭難死してしまう。村を出てアメリカで都会暮らしをする求婚者と、村の若者とのあいだで結婚を悩むが、結局村に残ることを決意して物語は閉じられる。しかし厳しい大地の暮らしぶりについてあまりにも生々しく描いた本作については、ケベックにおいては批判的な声もあった。

工業化・近代化を経た 1940 年代から 50 年代にかけては、登場人物の閉塞感などを扱った心理小説が世に送り出されるようになり、さらに 1960 年代から 70 年代は都市の生活や女性の自立を描いた近代小説が発表されるようになる。移民作家の活躍は 80 年代から顕著になり、やがて「移動文学」と呼ばれる潮流を成してゆく。1967 年にカナダ連邦で移民法が改正されると、差別的移民制限が撤廃され、カナダでは、出身や民族による移民の選定がなくなったことでヨーロッパ圏以外の出自を持つ移民が増加する。次節では、移民作家の活躍とケベック文学の現在の動向について見てゆきたい。

ケベック文学の動向

カナダの移民政策は 1869 年に遡る。この年、初となる移民法が可決されると、労働力の不足を補うために移民の受け入れを積極的に行っていった。景気の後退時には門戸を限定していた時代もあり、1950 年代には排他的な移民受け入れ方針が推し進められたが、1967 年の改正により、人種・民族・国籍による制限が撤廃されている。また州政府に一部の決定件が委譲されたことで、ケベック州ではフランス語という軸に重きを置いた特別基準を設定することができるようになった。この改正により、フランス語がケベック人としてのアイデンティティの根拠となり、その後の移民作家の活躍を考えるうえでも重要な転換となったことは間違いない。じじつ、1980 年代には移民作家によるフランス語の作品が次々と刊行されることになる。ロベール・ベルエ＝オリオルはこの流れを「移動文学 (écriture migrante)」と名付け、次のように述べている――

移動 (文学) のエクリチュールは、移住する主体者が手掛けた文学作品というマイクローパスを成している。それは身体と記憶のエクリチュールであり、基本的には残してきた祖国、または失われた祖国、あるいはフィクションの一義的素材となる実

際为国でありファンタズムというような広大な参照物によって練り上げられている。⁴⁾

ベルエ＝オリオルが名付けたこの動きは一過性のものにとどまらず、当初はイタリア系のマルコ・ミコーネなどヨーロッパからの移住作家や、ナウム・カタンなどのユダヤ系、そしてエジプト出身のアンヌ＝マリ・アロンゾらの活躍が目立ったが、昨今ではアジア系女性作家の活躍も目覚ましい。ダニエル・シャルティエはこうした移動文学の動きを次のように指摘する――

移動文学という文学的現象が、20世紀末に人々を魅了する文学潮流として現れたのだが、それはとりわけ歴史的な手法で、ポストモダニズムと移民性によって定義されたこの時代の大きな思想の潮流にケベック文学の進化を結びつけてきたからである。と同時に、帰属のデリケートさと多様性を目的とするアイデンティティにかんするある種の条件に結び付けてきたためでもある。この動きがケベック文学を自らの境界の外へと運んでしまうのではないかと恐れた人もいる。他方で、文学が出自へのノスタルジーに流出せぬようなやり方で、こうした境界を再定義することがまさにここで問題となっているのである。文学における移動の歴史は我々に、移動文学の歴史的根源がケベックにおける文学活動の歴史全体を貫くことを思い出させてくれるし、今日においてはそれこそが、ケベックの想像的領土の周縁や境界の網羅的な史料編纂に向けた再読のために、新たな要求そのものであることが明らかとなる。⁵⁾

「英語の海」に囲まれたケベックにおいて、さらには有名な逸話としてイギリス人ダラム卿によって「歴史も文学も持たない民族」と揶揄されたケベック人にとって、フランス語で作品を次々と上梓する移民作家が今やケベック文学の層を押し広げる大切な担い手となっていることは疑いえない。移民作家が扱うテーマの変遷について、山出裕子は次のように指摘する――

これまでに出版されたケベックの移民文学作品の多くは、移民たちがケベック社会に同化することができず、ケベック人としてのアイデンティティを構築することもできず、ケベックの外側に居場所を見出していく過程が描かれていた。例えば、1980年代から1990年代にかけて文学作品を発表した、ユダヤ系ケベック移民のレジヌ・ロバン (Régine Robin) は、彼女の見出したケベックの「外側の空間」(Hors-lieu)と呼んだ。これは、この時代に盛んに論じられた、ポストコロニアル理論における「第三の空間」に通じる概念である。

その後、2000年代に入ると、ポストコロニアル理論からグローバリゼーションが論じられるようになった。この時代におけるこうした変遷は、ケベックで「間文化主義」が文化政策として掲げられるようになった背景でもある。[……] そうした背景にあって、エスニック・マイノリティが、ケベックの移民としてではなく、新たなケベック

文化の担い手である「新ケベック人」としてアイデンティティを持つことが可能になったのである。ゆえに、この時代に発表されたキム・チュイの作品は、2000年代にかけて変貌を遂げた、ケベックの多（他）文化に対する態度を、克明に描いているものであるといえよう。⁶⁾

山出が指摘するように、移民作家のケベックに対する視線は、時代とともに移り変わる傾向が見てとれる。レジーヌ・ロバンだけでなく、たとえばウーク・チャンクの小説『キムチ』⁷⁾でも周辺へと追いやられた移民者の内面が吐露されている。あるいはまた、1992年にデビュー作を刊行したイン・チェンは、いち早くフランス語作品を上梓したアジア系女性作家である。上海出身の彼女は復旦大学でフランス文学を専攻した後、モントリオールに渡り、現在ではバンクーバーで創作活動を行っている。中国の旧習を扱った『水の記憶』(1992年)⁸⁾など、中国社会に対する批判的な眼差しで女性の自立を描いた作品が多い。また学び始めたばかりのフランス語で執筆したという『椿』⁹⁾で1999年に作家デビューを果たした岐阜出身のアキ・シマザキは、日本社会の抱える歴史問題を、言語的・地理的な距離を保ちながら描き続けている。両作家とも厳しい眼差しで祖国を描き出しているが、作品のなかで言及されることのないケベック社会こそがこの眼差しを生み出し、可能としていることが相対的に感じ取れるような構造となっている。いっぽう2000年代にデビューしたキム・チュイの作品では、祖国ベトナムも第二の祖国ケベックも、ともに相対化されて描写されている。ベトナム戦争終結後に社会主義国家へと移行したことから、南部サイゴンに暮らしていたキム・チュイ一家は、迫害の危険から祖国を去ることを余儀なくされる。チュイ一家のようにボートピープルとして国を去った人々の数は1979年にピークを迎えたと言われているが、出身国ベトナムとケベックの現代社会を、彼女は時空を超えて横断的に描き出す。第1作となった『小川』のなかで、主人公グエン・アン・ティンは自らの立ち位置について次のように結論づける――

このことがあったのと同じ時期、上司がモントリオールの新聞記事を切り抜いていた。その記事では「ケベック」はコーカソイドのものであり、私の切れ長の目は自動的に除外カテゴリーに分類されてしまうと繰り返されていた。たとえケベックが私にアメリカン・ドリームを与えてくれていたとしても、しかも30年も育み続けてくれたとしても。では、誰を愛せというのだろうか？ 誰も愛さないか、どっちも愛するか？ 私はどちらにも属さず、両方を愛することに決めたのだ。¹⁰⁾

祖国に対してばかりでなく、第二の祖国カナダのケベックに対しても複雑な思いを秘めながらフランス語の書き手となったケベックの移民作家にとって、フランス語という新たな表現手段を通して、自らのポジショニングともいえるべき距離感を丁寧に説明するエクリチュールを獲得する過程は、言語とアイデンティティが常に密接にかかわってきた歴史を経たケベック人の姿と重なる。第二の母語となったフランス語で言葉の壁と対峙しながら執筆する移民作家は、フランス語が必ずしも自明の存在ではなかったケベック人にとって、ケベック文学とは何かという問いに対し、まったく異なる視点から回答の可能性を示してくれる重要なキーパーソンである。次節では、移民作家キム・チュイ誕生までの道のりと、彼女の作品のなかで相対化され続けるフランス語について見てゆきたい。

作家キム・チュイの誕生

デビュー作の『小川』で RTL-Lire 賞、アルシャンボー文学大賞、そしてカナダで最も権威ある賞とされるカナダ総督文学賞を受賞したキム・チュイは、ケベックで一躍名を馳せるとともに、昨今ではフランス語圏文学作家として注目されている。ポートビールとしてベトナムからカナダへと移り住んだ主人公グエン・アン・ティンの数奇な運命と、祖国ベトナムの分断の歴史、移民としての暮らし、異国情緒を喚起させるベトナム文化といった物語の厚みに加え、作品全体を包む鋭くも、どこまでも温かな眼差しが読者の胸を刺す。しかし第一作が世に出るまでの作家の道のりは容易ではなかった。10歳でカナダの地に降り立ったキム・チュイの家族を待っていたのは、まずはフランス語の習得であった。英語圏カナダのなかでも言語・文化的に特異な歴史を持つケベック州で、フランス語という新たな言語を獲得してゆかなければならなかった。『小川』の主人公がケベックに渡った後にも次のようなエピソードがある――

私にとってカナダで最初の先生は、現在の世界へと運ぶ橋を、グループで最年少だった私たちベトナム人7人が渡れるよう付き添ってくれた。未熟児で生まれた赤ちゃんに対する母親のような繊細さで、私たちが移住できるよう世話をしてくれた。[……] 彼女が身を屈め、その両手を私の両手の上に置いて、「私はマリー＝フランス、あなたは？」と言うと、爽やかで、軽やかで、柔らかな香りの雲に包まれてうっとりとしてしまい、瞬きもせず、理解する必要も抱かずに、一音一音を繰り返した。[……] 一度自宅で、両親にその音のつながりを繰り返してみせた。「私はマリー＝フランス、あなた

は?』。すると両親は名前を変えたのかと尋ねた。自分の現実に引き戻されたのは、まさにこの瞬間であった〔…〕。¹¹⁾

かつてフランス領であったベトナム出身ではあるが、作家自身も実際、ケベックに渡った後にゼロからフランス語を学んでいる。彼女のエクリチュールを貫くのは、10歳で新たな言語と向き合った少女キム・チュイの姿勢でもある。あるいは、言語学と翻訳を学んでいた女子学生キム・チュイの姿とも重なるだろう。『ヴィという少女』の一節――

シブガモ出身のクラスメートで、その後大親友となったジャサントがいなければ、私が翻訳学の学位を取得することなど決してなかっただろう。最初の授業で課された練習問題に取り組んでいるときに、彼女に「修辞学」の意味と、「大惨事」という単語が男性名詞か女性名詞か尋ねた私の無邪気さに、ジャサントは打たれたと言う。惨憺たる成績結果を受けて、教授が学部を変更するよう私に強く勧めてきたにもかかわらず、ジャサントは私に勉強を続けるよう説得した。かつて一度たりとも私は、クラスのビリになったことなどなかった。恥ずべき自らの成績を前にした屈辱も、ジャサントの大きな愛情によって乗り越えることができた。¹²⁾

キム・チュイは2016年の訪日の際に¹³⁾、自らのベトナム語は10歳で止まっているため、心の機微に触れ得るような表現については獲得できていないと話しているし、フランス語についても習得の苦勞と、編集者から語彙についての示唆を受けていることを詳らかにしている。カナダ人として、彼女がフランス語についても英語についても流暢な話し手であることは確かだが、作家のフランス語に対する姿勢は、幼くしてカナダの地に降り立った主人公の姿そのままであるとも言える。フランス語を常に学び続ける作家の姿勢は、移民作家ならではのとも言えるが、キム・チュイの根底にあるのは、言葉への懷疑である。彼女が言葉に対する絶対的とは言えない関係性を感じるのは、ベトナム語に対しても同様である。『小川』のなかで仕事のためにベトナムに戻ったグエン・アン・ティンは、南北の言葉の違いを改めて知ることになる――

彼女の言うとおりだった。私はあまりにも早く諦めてしまった母語を学び直すべきだったのだ。〔…〕南部の出身だったため、ベトナムに戻る前まで北部の人々が話すのを一度も聞いたことがなかった。同じようにベトナムが再統一されるまで、北部の人間は南部の人間が話すのを聞いたことがなかった。カナダ同様、ベトナムもまた、ふたつの孤独を抱えてきた。ベトナム北部の言語は、その当時の政治的・社会的・経済的状況下で進化した。たとえば屋根上に設置された軽機関銃で飛行機を撃ち落とす様

を表すための言葉や、グルタミン酸ナトリウムで血が凝固するのをいかに速めるかという言葉、サイレンが鳴ったときにどうやって避難場所を見つけるかという言葉など。この間、南部の言葉は舌の上で弾けるコカ・コーラの泡の感覚を表したり、南部の通りにいるスパイや反逆者や共産主義シンパを名付けるための用語だったり、米軍兵士たちが熱狂した夜に生まれた子どもたちを指す名詞を生み出した。¹⁴⁾

母語であるはずのベトナム語についても十全に習得しているわけではないという事実に加えて、北部と南部のベトナム語の違いが、言語に対する揺らぎを作家に痛感させる。ベトナムまたはケベックの「どちらにも属さず、両方を愛することに決めた」主人公の姿勢は、そのまま言語に対する作家の姿勢を体現している。じじつ、彼女には通訳として働いた経験もある。41歳で作家デビューを果たしたキム・チュイが誕生するまでには、ボートピープルという過酷な経験だけでなく、さらに長い道のりもあった。裁縫師・通訳・弁護士・レストラン経営など様々な職業を経て、『小川』刊行に至るのは2009年である。キム・チュイが愛してやまないというインドシナで幼少期を過ごしたフランス人女性作家マルグリット・デュラスも、第1作の出版は29歳と決して若くはなかったが、さらにキム・チュイは10年以上も年齢を経て、ようやく作家としての一步を踏み出したことになる。ケベック州の公用語であるフランス語、そのケベック州が位置する国家カナダのなかで主流言語である英語、さらに母国ベトナムにおける南北の言葉の違い——ボートピープルとして数奇な生い立ちを持つキム・チュイの作品テーマに加えて、作家と言語との関わりは特異なものであり、それを後押ししたのが、たまたまカナダのなかでも移民として受け入れられたフランス語圏のケベック州だったということになるだろう。さらに『満ち足りた人生』においては、ケベックのフランス語とフランスのフランス語の違いについて次のように描かれている——

リュックは、私が文法や論理展開、さらには意味についても、ひどく取り違えてしまうことを知っていた。一度など、お気に入りの一節「自分自身の気持ちを取り逃がしてしまった」に下線を引いて、リュックに歌詞を送ったことがあった。文法的には「自分の気持ちから逃げる」または「気持ちが私のもとから逃げてしまう」が正しくて、偶発的に気持ちを失うなんて不可能だということを知らなかったのだ。「逃げる」という動詞の誤用について詳細な説明をしてくれたが、それでもリュックは、ときどき私のケベック訛りのフランス語を、愛情とともに採用した。「(船底にタールを塗る) タールブラシ (カナダではモップの意味で使われる)」という言葉が、いたって優しく「モッ

プ」にとって代わり、「後に」は「その後で」という言い回しへとかわっていった。¹⁵⁾

作家自身の姿と重なるベトナム出身のケベック人である主人公マン自らの誤用ばかりでなく、ケベックのフランス語とフランス人リュックの話すフランス語との違いが、二人の愛情のなかで相対化され、絶対的ではない流動的かつ寛容的な言語との関わり方を示してくれる。いっぽうで作家キム・チュイの言語に対する懐疑的な姿勢そのものがなければ、次のような艶やかな一節も生まれなかったのではないか――

ある朝とても早く、陸地と水面に半分ずつ覆われた、メコン川の一支流に位置するカイバーの水上マルシェで、父方の祖母は祖父とすれ違った。1732 年以来、毎日、商人たちが卸売商と取引するために、三角州のこの場所まで果物や野菜などの収穫物を運んでいる。遠目に見れば、粘土を含んだ水の褐色と混ざり合う木材の色によって、メロンやパイナップル、ブント、キャベツ、カボチャを我先にと空中でキャッチするために夜明けから桟橋で待ちかまえている男たちのもとで、収穫物自体が漂っていくような印象を与えないこともない。[……] 祖父が祖母に目を留めたとき、小帆船が停泊する桟橋に立っていた祖母は、この反復され、シンクロした一連の動作に心を奪われていた。祖父のほうはまずは太陽の光に目が眩み、次に、少しばかり動作が大きくなってしまっただけで、とりわけ思慮のない僅かな所作ですぐにはだけてしまうベトナムドレスのプリーツによって、ことのほか際立ち強調された曲線美を持つこの若き女性に陶然としてしまった。¹⁶⁾

カイバーの水上マルシェでの出会いが、シークエンスとなって目の前で展開し、今や祖父母となった若かりし二人の出会いが、ベトナム出身の作家の手によって、フランス語で記される。漂う収穫物と陶然とする祖父の時間軸が祖母の時間軸とシンクロする瞬間に、運命に手繰り寄せられた二人の時間が溶け合ってしまう。チュイのエクリチュールが歴史と時間と言語を駆け抜けるかのように、フランス語を通してエクリチュールの可能性を開いてゆく。続いて我々は、作家の初期 3 部作を比較しながら、作品がどのように変化していったのかを明らかにしたい。

3 作品の特徴と比較

第 1 作にして、数々の文学賞を受賞したキム・チュイは、2011 年にはパスカル・ヤノヴァックとの共著『あなたへ』¹⁷⁾ を発表し、2017 年には一冊の物語とも言えるようなレシピと物語と写真が一体化した料理本を、2019 年には絵本を、

そして2017年と2019年には次男が自閉症であることもあり、自閉症関連の書籍出版にも協力している。さらに2018年、ノーベル文学賞の代替賞であるニュー・アカデミー文学賞の最終候補者4名のなかに残ったことは、快挙と言えよう。一瞬にして読者を魅了する物語の深化の流れに身を任せると、最後までキム・チュイの物語世界は我々にそっと寄り添うかのように、ベトナムとケベックを繋ぐ語りに引き込んでしまう。2020年には『エム』¹⁸⁾を上梓、さらには料理番組にも出演するなど多才な作家ではあるが、本稿では単著の小説に焦点を当て、とりわけ初期の3部作とも言える『小川』、『満ち足りた人生』、『ヴィという少女』の3作品について分析したい。キム・チュイ作品に登場する主人公は、ベトナム系ケベック人の女性で作者の姿と重なる。ふたつの場所を比較しながら、どちらを否定することも肯定することもなく、その差異のなかに自らを留めおく姿勢は作家自身へと通ずる。

『小川』では、作家と同じ申年の主人公グエン・アン・ティンが家族とともにケベックに渡る物語が描かれており、作家の幼少期を彷彿とさせるように、ベトナム戦争終結後の南部出身者への迫害、亡命、そして難民キャンプであるマレーシアを経て、第二の故郷となったケベックでの新たな生活が描かれている。グエン・アン・ティンは彼女の家族を温かく迎えてくれたケベックへの感謝を忘れない――

カナダに着いた最初の一年間、グランビーの町は私たちを包む温かな懐となってくれた。町の人々は私たち一人ひとりをあやしてくれるかのようにだった。私の小学校の生徒たちは、お昼ご飯に私たちを自宅に招待するため、列を成してくれた。こうして私たちのお昼の時間には毎回どこかの家庭の約束が入っていた。しかしほとんど空腹のままで私たちは学校に戻った。サラサラとしたご飯を、フォークでどうやって食べたらいいのかわからなかったからだ。[……] 私たちの皿に残ってしまったお米の一粒一粒が、寛大さと感謝の塊だった。¹⁹⁾

主人公グエン・アン・ティンは、その後仕事で祖国に戻ることになる。来日の折に作家自身が「ノスタルジーに陥る必要がなかった」と語っていたように、祖国は幼少期の思い出に残る姿と同時に、新たに発見する現在形の姿で描写されている。また、自閉症である次男アンリが車に身を投げ出す場面に立ち会うことになってしまったグエン・アン・ティンと、兵士に撃たれて息子を失ってしまったベトナムの母とがオーバーラップする場面は、時間と距離という時空

を超えたイメージが連なる筆致で描かれており、キム・チュイ作品の特徴となっている――

息子のアンリも、家出をする。[…] しかし一度だけ、ほんの一瞬見失っただけで、彼がかつてないほど熱狂に浮かれ生き生きとした様子で、何台もの車の前に身を投じるのを目にすることになってしまった。彼の予想外の、滅多にないような喜びようと、バンパー上の、空中に投げ出される彼の身体を見てしまうという恐怖がない交ぜになり、息が出来なくなった。衝突の目撃者となることを避け、自分がこの事実から生き長らえることができるように、目を閉じて、歩調を緩めてしまうべきだったのか？ 心臓を破壊し、膨張させ、息切れさせ、胸郭の外へ飛び出させてしまうほどの愛で母性が私を苦しめたとき、長男のパスカルが、どこからともなくやって来て、大通りの分離帯の刈り立ての芝生に、弟をかくまうのが見えた。ぽっちゃりとした小さな腿に、薄ピンク色の頬をして、小さな親指を天に向けたポーズを取りながら、パスカルはまるで天使のように弟に舞い降りたのだ。

私は二人の息子を腕に抱きながら喜びに泣いたが、私が泣いたのはまた、息子の死刑執行を目撃してしまった別のベトナム人の母親の苦悩のためでもあった。彼女の幼い息子は、死の1時間前には、革命を準備するために、レジスタンスに協力するために、伝言を男性から男性へ、手から手へ、隠し場から隠し場へと運ぶために髪を風になびかせて田んぼを走って横切っていたのであり、それはまた時には、単なる愛の言葉を届けるためであることもあったのだ。²⁰⁾

涙はゲエン・アン・ティンとベトナムの母の目に、語りの時間軸において同時に流れる形となって記される。無邪気な子どもたちにとって、死は必然でもなくまた偶然でもない。息子たちが自らの行為によって死に近づいたことは明らかだが、その結果が異なるのは単なる運命の悪戯を超えるものではない。二人の母の運命が入れ替わっていても何らおかしくはなかったからこそ、彼女たちの涙は時空を超えた涙として『小川』のなかで描写されることになる。それは普遍的な母の涙となり、親の臉を覆う雫となる。

時空を横断する作家のエクリチュールは、第2作の『満ち足りた人生』ではベトナムとケベックに加え、さらにフランスという第三の場所を内包してゆく形で記される。第2作では料理というテーマを主軸としながら、既婚者である主人公マンがフランス人シェフであるリュックとの出会いを通して、自らのうちに眠っていた感情と向き合い、その感情が少しずつ発露してゆく過程が描かれる。第1作では、ベトナムとケベックを移動する主人公の姿が描かれていたが、第2作ではパリという第三の舞台が取り込まれている。リュックとの出会

いは、主人公マンが出版したベトナム料理の本『天秤棒』を、リュックの姉であるフランシーヌが手にしたことから始まる――

フランシーヌと出会う前の週に、地元の本屋のショーウィンドーに飾られた『天秤棒』のカバー写真――照りのついた魚の切り身が盛られたテラコッタのお椀が、薪の燃えさしに半分はまりこんだ写真――が、フランシーヌの涙を感動で誘った。砂糖と、玉ねぎと、にんにくをまぜて熱したなかへ女性料理人が魚醤を注ぐ瞬間の孤児院の台所の一角に、まるで再び降り立ったかのように魚醤の香りが漂ってきて、フランシーヌを襲った。その日のうちに、フランシーヌはリュックに本を贈った。彼女同様リュックもまた、母が何にもまして好んだ、この強烈で比類なき香りを感じたのだった。母はこの料理を、ゆがいたキャベツか輪切りにカットしたキュウリと、蒸した米を添えて、少なくとも月に一度は作っていた。リュックは家を空けられる年齢になると、魚の照り煮が出される夜は、家から逃げ出すようになった。火を入れた魚醤の香りが苦手なのか、それとも、強迫観念と無力感で重くなったこの料理を囲む雰囲気嫌いののか、わからなかった。²¹⁾

ベトナムで医師として勤めていた父と、ベトナム孤児のために孤児院を営んでいた母とともに、姉のフランシーヌとリュックはベトナム戦争終結直前にサイゴンを離陸する最後の飛行機に飛び乗った。フランス人の母は、孤児たちを置き去りにした後悔をパリに帰国した後も引きずり続け、料理という形で強制的にリュックの幼少期を覆ってしまう。ベトナムに心を置いてきてしまった母を理解することをリュックがようやく受け入れたきっかけが、マンの手掛けた『天秤棒』の存在であった。魚醤の強烈な香りがフランシーヌをサイゴンへと立ち戻らせ、生後13カ月でフランスへ帰国したリュックに対しては、母につきまとうベトナムの暗い影とともに食卓を囲んだ彼の幼少期へと一瞬にして時間を巻き戻してしまう。祖国ベトナムのもうひとつの歴史を、こうしてマンはリュックとともに辿る。料理を基軸に展開する重層化した物語は、第3作にも引き継がれている。『ヴィという少女』では、未婚の女性である主人公ヴィが、ベトナムでヴァンサンというフランス人と出会い、彼の失踪によってケベックへの帰国をいよいよ決心するところで物語が閉じられている。

この第3作では、横断の物語であることがより明白な形で読者に提示される。キム・チュイ小説の特徴として、全体が短い節から構成されていることが挙げられるが、『小川』においては各節の冒頭が大文字で記されていた一方で、『満ち足りた人生』においては各節の冒頭の多くにフランス語とベトナム語の2言

語表記で、キーワードが冠される。『ヴィ』のなかでは、これが各節に因^{ちな}んだ土地の名前となる。そのいくつかを記された順で紹介すると、メコン、ハノイ、サイゴン、カイパー、チョロン、北京、プリュージュ、マレーシア、カナダ、神戸、ニャチャン、コペンハーゲン、マンハッタン、上海、ローマ、ベルリン、リオデジャネイロ、カンボジア、トンキン、コーンウォール、ケランヌ、プリンストン、台湾、ベトナム……。世界を何周も回るかのように、想起された場所や訪れた場所を巡りながら、ボートピープルであったヴィの生涯が各地の時間軸とリンクする。トンキンでは、トンキンスープの逸話から20年間の北ベトナムの凝縮した歴史がふと顔を覗かせる――

モントリオールやロサンゼルス、パリ、シドニーあるいはサイゴンで調理されたものと何ら共通点のないハノイのトンキンスープを飲んで、私は日々を終えていた。ハノイでは、スライスされた牛のレア肉を数枚添えたスープが提供されたが、以前私が食べていたトンキンスープには、必ず十数種類の食材がのっていて、たとえばすじ肉、胃袋、脛肉、タイバジル、もやしなどが入っていた。[…] しばらく経つと、鶏肉入りスープの場合にはカフェライムリーフを、牛肉入りスープの場合には焼き生姜の風味を引き立たせてくれる、そのシンプルさを評価できるようになった。当然店主の女性に、私のスープには匙一杯分のグルタミン酸ナトリウム塩で味付けしないで欲しいと頼まなくてはならなかった。戦時中、塩は貴重な調味料だった。しかし困難を極める時代にあつては、塩は味を強めるためにだけに用いられたわけではなかった。味そのものであると同時に、白米にのせる唯一の食材でもあったのだ。²²⁾

南部に位置するサイゴン（現ホーチミン）出身のヴィにとって、任務で赴いた「鉄のカーテンの向こう側」²³⁾ が20年の時を経て現れる。そして彼女の発見とともに、ケベックで暮らすサイゴン出身の母たちの思いもまた同時に溢れ出す描写とともに記される――

最後に母のもとを訪れたとき、私が北ベトナムで新たに学んだ単語を北部訛りで発音するたびに、母の寿命は少しずつ縮んだことだろう。祖国に戻って共産主義に仕えるような娘を育ててしまったこと、私が南ベトナム兵士の霊に背信するレッド・プリンススになってしまったことを、母の友人たちは悔やんでいた。もし私が稲光に打たれる運命だとしたら、母に知っておいてもらいたかった。前線に息子たちを送ることなど選びはしなかった母親たちに、政治的忠義など選びはしなかった母親たちに私が出会ったことを。母と同じように、彼女たちはただ、子どもたちに自分より長生きしてもらいたいと願っていただけだ。²⁴⁾

第1作『小川』では、ベトナムとケベックが相対化され、第2作『満ち足りた人生』では、フランス語がベトナム語、ケベックのフランス語、フランスのフランス語を通して相対化され、第3作『ヴィという少女』では、ベトナム北部と南部が相対化されることで、物語そのものがもはや着地点を持たない両義的な位相に置かれる。世界を駆け巡るような見出しの提示により、その印象はより明白な形でメッセージとして読者にも明示されている。2023年2月の来日時²⁵⁾、作家は『ヴィ』の結末について何度も追記しようとしたが書き加えることができなかったと語ってくれた。小説は次のように終わっている――

自分との決別を、ヴァンサンのヴィを見捨ててしまおうか、私は迷っている。迷っているとすれば、それは何も言わずに、ヴァンサンの子供の青い大きなスカーフ以外は何も持たずに、ここを離れるつもりだったから。私が迷っていたら、代わりにハンが決めてくれた。「あなたのお父さんはハノイにいるわ……孤児院に。来月から、私たちと一緒に住む予定なの」。「お父さんが良くなるまで、私たちが面倒をみるのよ」、とアリヌが付け加える。目をやれば、湖のもう一方の端へと人が押し寄せている。百歳を迎えた亀の甲羅が、湖から再び現れたところだった。良い知らせをもたらす兆しと信じられている。²⁶⁾

主人公ヴィの迷いは、作家の迷いであり、キム・チュイのエクリチュールの持つ迷いである。優柔不断で、息子たちが戦地へと送られる事実からも目を背け続けた夫を残したまま、主人公ヴィの母は3人の子どもたちとベトナムを離れることを決意する。最愛の夫を一人残すという最大の裏切りの後、当の父はトゥードック地域にある再教育収容所に送られ、解放された後は所有していた財産をすべて売却し、英語を教えたり、レストランのウェイターをしたり、翻訳をして生計を立てていた。友人のアリヌが経営する孤児院に収容されることになった父との再会は、物語のなかで「待機」のまま閉じられる。任務でベトナムに戻りながらも、父との再会を躊躇する主人公ヴィの迷いこそ、そしてこの未完の形こそ、キム・チュイ初期3部作のある種の結論のようにも思われる。ベトナムの歴史をそこに留まり生きた父、ベトナムと決別し、ハノイに赴任した娘を受け入れがたい母、空白のベトナムの歴史を抱える主人公ヴィが、和解することなく、しかし互いを意識しながら互いの境界を侵さない慎みさと寛容さを持ち続けながら、物語はハッピーエンドも迎えず、かと言って悲劇となることも避けられている。3作品の比較を容易にするよう、簡略化を恐れず

にまとめると、以下の表のようになる――

	主 人 公	ボートピープル	結 末
『小川』	既婚のベトナム人女性	主人公	主人公の成長
『満ち足りた人生』	既婚のベトナム人女性	主人公の夫	恋人との別離と再会の展望
『ヴィという少女』	未婚のベトナム人女性	主人公	恋人との別離、父との再会の可能性

表のなかで明らかなように、3作品を貫くテーマはベトナムからケベックへの移民である。共通となる主題が、それぞれ女性主人公の人生を通して描かれているのだが、3部作のテーマは一見似てはいても、キム・チュイの目指すエクリチュールはより間隙という位相を明瞭にするかのように深化しているように思われてならない。この不完全性が本書の第2のテーマとなっており、物語の構造そのものになっている。というのもこの不完全性は『ヴィ』の主要なテーマでありながら、物語に欠如をもたらすものでもあり、読書体験における結末の頓挫からくるフラストレーションを生むと同時に、余韻というよりはむしろ余白を私たち読者に強いているからだ。このような体験をいっそう生々しい読書体験としてもたらすことに、キム・チュイ作品は注力を注いでいると言えるだろう。

結 語

本稿ではケベック文学の歴史を確認した後、現在のケベック文学の可能性を新たな視点から支え、広げる移動文学の流れを辿り、その一人として移民作家キム・チュイ作品に注目し、とりわけ彼女の初期3部作の分析を行った。祖国ベトナムと第二の故郷であるケベックを比較しながら、ノスタルジーとして風化する思い出のなかで祖国を捉えるのではなく、キム・チュイはその後のベトナムを時にフランスという視点から描き、時にベトナム南北を比較することで流動的な存在として描いている。また作家が執筆言語として選ぶフランス語が、ケベックというカナダ連邦の一州でありながらフランス語のみを公用語とする特異な歴史のなかで、偶然の重なりによって与えられたものであることも見てきた。彼女の移民先がケベック州以外の地域であったなら、当然ながら作家の

作品からケベック・フランス語とフランス・フランス語の逸話は出てこなかったし、もしかしたら、ベトナム語の南北の違いについて作家の関心が向けられることもなかったかもしれない。キム・チュイの言語感覚がケベック人とフランス語との特殊な関わりに接するなかで醸成され、それによって彼女独自のエクリチュールが獲得されたことは明らかである。対英語のみならず、対フランス・フランス語との関係によって常に相対化される特殊なケベックのフランス語のなかで、かくのごとき流動性に対して開かれ続けることを引き受けた力強さが彼女のエクリチュールを支えているのである。

註

- 1) Dany LAFERRIÈRE, *Comment faire l'amour avec un nègre sans se fatiguer*, Montréal : VLB, 1985. 邦訳はダニー・ラフェリエール『ニグロと疲れないでセックスする方法』(立花英裕訳), 藤原書店, 2012年。
- 2) Gilles VIGNEAULT, *Mon pays*, 1965.
- 3) Louis HÉMON, *Maria Chapdelaine*, Montréal : Godin-Menard, 1916. 1913年, フランスの日報『ル・タン』に掲載後, 1916年にモントリオールで出版。邦訳はルイ・エモン『白き処女地』(池田公麿訳), 旺文社文庫, 1974年, 他多数。
- 4) Robert BERROUËT-ORIOU et Robert FOURNIER, «L'Émergence des écritures migrantes et métisses au Québec», *Quebec Studies*, n° 14, 1992, p. 17.
- 5) Daniel CHARTIER, «Les Origines de l'écriture migrante. L'immigration littéraire au Québec au cours des deux derniers siècles», *Voix et Images*, vol. 27, n° 2, 2002, p. 316.
- 6) 山出裕子「ケベックのアジア系女性文学に見られる「間文化主義」とエスニシティの変遷」, 『文芸研究』第117号, 明治大学文芸研究会, 2012年3月, 165頁。
- 7) Ook CHUNG, *Kimchi*, Paris : Le Serpent à plumes, 2001. 邦訳はワーク・チャング『キムチ』(岩津航訳), 青土社, 2007年。
- 8) Ying CHEN, *La Mémoire de l'eau*, Montréal : Leméac, 1992.
- 9) Aki SHIMAZAKI, *Tsubaki*, Montréal : Leméac, 1999. 邦訳はアキ・シマザキ『椿』(鈴木めぐみ訳), 森田出版, 2002年。
- 10) Kim THŨY, *Ru*, Montréal : Éd. Libre Expression, 2009, p. 88. 邦訳はキム・チュイ『小川』(山出裕子訳), 彩流社, 2012年。
- 11) *Ibid.*, pp. 19-20.
- 12) Kim THŨY, *Vi*, Montréal : Éd. Libre Expression, 2016, p. 88. 邦訳はキム・チュイ『ヴィという少女』(拙訳), 彩流社, 2021年。
- 13) 2016年10月8日に明治大学にて開催された日本ケベック学会の全国大会にて講演

「ベトナムとケベックのあいだで書くこと」を行った際に、自身とベトナム語との関係性について語ってくれた。

- 14) Kim THÚY, *Ru*, pp. 88-89.
- 15) Kim THÚY, *Mãn*, Montréal : Éd. Libre Expression, 2013, p. 124. 邦訳はキム・チュイ『満ち足りた人生』(拙訳), 彩流社, 2023 年。
- 16) Kim THÚY, *Vi*, p. 13.
- 17) Kim THÚY et Pascal JANOVJAK, *À toi*, Montréal : Éd. Libre Expression, 2011.
- 18) Kim THÚY, *Em*, Montréal : Éd. Libre Expression, 2020.
- 19) Kim THÚY, *Ru*, p. 31.
- 20) *Ibid.*, pp. 134-135.
- 21) Kim THÚY, *Mãn*, p. 98.
- 22) Kim THÚY, *Vi*, pp. 102-103.
- 23) *Idem.*
- 24) *Ibid.*, pp. 116-117.
- 25) 邦訳『満ち足りた人生』の出版に合わせて来日し, カナダ大使館や東京日仏学院, ブックハウスカフェなどで登壇した。
- 26) Kim THÚY, *Vi*, pp 138-139.

〔付記〕本稿の執筆にあたっては、とりわけ以下の著作を参考になっている。まず、カナダ首相出版賞審査員特別賞を受賞した小畑精和『ケベック文学研究』(御茶の水書房, 2003 年) は、日本に広くケベック文学を紹介した重要な一書。また、カナダの移民政策についてはヴァレリー・ノールズ『カナダ移民史』(細川道久訳, 明石書店, 2014 年) を、ケベックの特異な歴史についてはジャック・ラクルシエール『ケベックの歴史』(小倉和子他訳, 水声社, 2023 年) を参照した。